

A 47 / 28

コミュニケーション英語Ⅰ，Ⅱ，Ⅲにおける読解力の向上

— 英語を一時間読み続ける力を育成するための授業とシラバスデザインの開発 —

山本 昭夫 (学習院高等科)

概要

平成21年3月告示の新学習指導要領の新科目「コミュニケーション英語Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」は、社会に通用する読解力の養成を目的にしているが、その基礎として英語を読み続ける力（読みの持久力）を育成することは欠かせない。英語多読は読みの持久力を養う。一方で英語を読む習慣の定着や学習者自身による適切な選書は意外に難しく、積極的な選書指導と複数年の授業内多読の設置が望ましいという結論に至った。

1. 研究目的

平成21年3月告示の新学習指導要領において、外国語では「コミュニケーション英語」という新しい科目が加わる。新科目は3段階に分かれ、最終段階の「コミュニケーション英語Ⅲ」では、学習した英語を「社会生活において活用できるようにする」ことまで要求されている。読解力に絞った場合、社会生活において活用できる英語力には、情報や考えなどを的確に理解することを「長時間」行うことが求められる一方、あまり強調されることはなかった。従来の教科書はもちろん、今後出版される新教科書だけでは、学習者に大量の英語を読ませる分量を提供することは容易ではない。英語多読を授業内外に取り入れることは、学習者が大量の英語を読み続けることを可能にし、学校で身につけた英語を社会生活において活用できるようになる機会を学習者に与える。本研究は、英語多読を「一時間英語を読み続けること」と設定し、その読み続ける力を養うための授業とシラバスデザインの開発を目的にする。また高校生が英語を読み続ける力の実態調査を行い、さらに読み続ける力についても考察を加え、読解力の新しい力として認知されることを提案する。

1.1. 予想される研究成果の概要

- 1.1. 1. 新学習指導要領の「コミュニケーション英語」で求められる「社会生活において活用できるようにする」力の一つとして、英語の文章の「情報や考えなどを的確に理解」することを長時間行う力（読みの持久力）が再考察され、読解力の新しい力として認知される。
- 1.1. 2. 高校生が英語を読み続ける力の実態調査とその分析が行われる。
- 1.1. 3. 英語多読を「一時間英語を読み続けること」と設定し、その読み続ける力を養うための授業とシラバスデザインが開発される。

2. これまでの経緯

英語多読は、古今東西その重要性が指摘されていながら、学習指導要領において正式な科目にはない。授業外の英語多読の例としては、山梨英和中学校・高等学校において、年に2回「リーディング・

マラソン」という4週間の多読プログラムが20年以上行われている。英語多読を走るマラソンに見立て、多読用の本の使用語数を距離数に換算し、英語の本で「フル・マラソン」の完走を目指す。授業内英語多読は、酒井邦秀と神田みなみ共著の『教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ』の出版前後から全国的に見られるようになった。多読三原則「辞書は引かない」「わからないところは飛ばす」「進まなくなったらやめる」を提唱し、従来の英語指導・学習方法の再検討を促した。豊田高専（2009）では、「45分×30週×5年間＝113時間の授業時間を確保した結果、初めて、過半数の学生が累積読書量100万語を達成している」とし、授業内多読の必要性を説き、10万語で多読に慣れ、30万語でクラス平均点の向上、100万語を超えると学習者個人毎の英語力向上が見られると報告している。

英語多読は従来の英語指導・学習方法とどこが異なるか。従来の英語学習・指導は、新出語や構文理解に追われて読書を楽しむ前段階で終わってしまうことが多いように思われる。一方、英語多読は英語の読書を楽しむありきである。与えられた一冊の本を長期間使用し、短い文章を一斉に読み、読後に必ず読解問題を解く従来の英語学習・指導と一線を画して、英語多読では、学習者が自ら英語の本を選択し、自分のペースで好きなだけ読み、読後の読解問題はない。本研究の英語多読は、次の3つの理論に基づいている。

2.1. 「砂場仮説」(Kids-play-with-sand Hypothesis)

「砂場仮説」(Yamamoto, 2006)は、外国語としての英語学習においても夢中になってたくさん英語の本を読むうちに必要な技能が身につく、その場所づくりに英語多読が一役買うのではないかと提案するものである。幼稚園の砂場が園児を魅了して、幼児は無心でいつまでも城や団子を作り、その結果五感を磨き、思考力や身体技能を高め、想像力を育成する。英語多読の環境が整い、学生の自主性を重んじることにより、学習効果が高まる可能性がある。教員の説明や指示は極力限定され、学習者の自主的な学習活動の促進が推奨される。学習者本人のやる気に勝る指導法はないという考えである。

2.2. 「ビーチ仮説」(Beach Hypothesis)

「砂場仮説」が学習者の立場から英語多読の効用を説いたのに対し、「ビーチ（浜辺）仮説」(Yamamoto, 2007)は、指導者の役割を説明するものである。英語多読を海水浴に例えて、浜辺から徐々に深いところへ泳いでいくように英語の本を読んでいくことを薦める。学習者は自身の好みや英語の力に応じて選書を行い、より多くの本を読むことを通して、英語を読み続ける力をつける。ちょうど、浜辺で海水浴をすることもちどものように、水泳の力量に合わせて浅瀬で泳いだり、遠泳をしたりすることに似ている。そのとき教員の役割は、3つのG (Graded, Guided, Guarded) である。泳ぐ（読む）レベルを無理なく徐々に上げ、適切な遊泳場所（選書）を助言し、力量以上の場所（難読書）に行ったときには注意する。

2.3. 「読みの持久力仮説」(Reading Stamina Hypothesis)

英語多読は効果的であると言われているが、多読によって身につく力が何かという共通見解はまだ十分に検討されていない。山本（2008）は、英語多読で身につく力は、「読みの持久力」であると提案した。「読みの持久力」は、文章を適度な速さを維持しながら長時間一度に何ページも読み続ける力である。適度な読みの速度と時間、ページ数は、精読や遅読にならない100～150wpm くらいで、

30分から1時間に何十ページも読むことを目安にしている。「読みの持久力」形式と意味の絶え間ない変換の反復作業によって培われ、概念的知識の増加に寄与するものと仮定される。

3. 実践と研究の実施と成果

3.1. 授業実践

平成22年4月から英語多読の授業を担当して、一年後に「一時間英語が読み続けられること」を目標に設定した。とりわけ選書の指導に工夫を凝らした。2月の最後の授業で、4月に設定した多読目標を確認する試験を行った。

3.2. 研究会

平成22年度学習院教科連絡会外国語部会（学習院大学中央教育研究棟国際会議場）において、英語多読における選書の難しさについての口頭発表を行い、多読教材や図書館の利用方法、授業案やシラバス案について意見を交わした。また、学内で「英語多読研究会」を催し、学習院の内外から参加者を集めて本年度の英語多読研究の報告を行った。学習院における多読は、蔵書が各科・大学にあり、中等科、高等科、大学において授業実践が行われている。

3.3. 学会発表と成果

学会発表は下記のとおりである。

- ① 「英語多読における知識獲得 ～ 読みの持久力は知の基盤の働きをする器 ～」電子情報通信学会思考と言語研究会「発達と知識獲得」機械振興会館。5月28日。
- ② 「多読に見る反復2-変化する環境と言語使用のための反復学習」第10回 日本第二言語習得学会年次大会ポスターセッション。岐阜大学地域科学部H棟。6月13日。
- ③ 「多読の選書」関東甲信越英語教育学会 第34回茨城つくば研究大会ポスターセッション。筑波大学第3エリア 3A棟。8月22日
- ④ 「英語多読における学習者の選書傾向—高校生の英語の選書傾向を探る—」日本教育心理学会第52回総会 口頭発表。早稲田大学10号館。8月28日。
- ⑤ 「多読の選書と指導の難しさ」多読授業研究会 口頭発表。豊田高専図書館。12月11日。

機械振興会館と岐阜大学における発表では、英語多読学習における反復について理論的再検討を行い、多読効果の解明に迫った。筑波大学、早稲田大学、豊田高専における発表では、いずれも英語多読における選書の困難点を明らかにして対処法を提案した。

本研究の成果による見解は、次のとおりである：

- (1) 英語多読で育成されると言われる「読みの持久力」は、言語運用基盤として、使用可能な言語知識を蓄える器に例えられた。また、上位概念として提案された「認知持久力」とともに、検証や指導方法についてさらに研究や実践が求められる。
- (2) 多読の選書は、想像以上に日本の英語学習者にとって困難である。通常の英語の授業では、教科書は与えられ、読む文章も決まっており、一斉に読み、受け身の読みに慣れ過ぎている。学習者の選書未体験、英語を持続して読む力や習慣の不足、英語を読む上での学習者の信条などが選書困難の原因と考えられる。選書経験が乏しいために、どんな本を選んでよいか分からない。仮に読みたい本が見つかったとしても、読むに耐えうる力が足りない場合もある。読める程度

の英語の本を選ぶと、今度は「易しすぎる」と考えてしまう。実際は読み続けるのに一苦労でも、難しい単語や構文が出てこない「簡単」と思う傾向がある。また易しい文章は読みたくない、というプライドを持つ学習者もいる。自ら選んで読んでみたい本と英語力が見合わなくなるため、選書自体も選書指導も難しい。

- (3) 多読の選書にはしかるべき指導が必要である。具体的には、1年後に読めるようになる Graded Readers (非英語圏の英語学習者向けに段階的にレベル別になった本のシリーズ) を提示し、導入段階で Leveled Readers (英語を母語とする幼児や児童向けに段階的にレベル分けされた絵本である) の1シリーズを読破することを短期目標に掲げる。学習者は、読後に読んだ本の語数や短い感想だけでなく、授業後や授業のない日の読書自体の内観を書いて英語多読学習のメタ認知を高める。中長期的な目標を提示する。学年末に目標に掲げたレベルの Graded Readers を所定の時間で読ませて「読みの持久力」がついたことを実感させる。
- (4) 英語多読のシラバスデザインにおいては、上記のような選書指導を盛り込み、複数年の英語多読授業を提案する。週に1時間の授業内多読が望ましいが、1年間の多読授業だけではその効果が表れにくく、また英語の本を読むという習慣が十分に定着しにくい。授業内多読が難しい場合は、「朝の読書」のように学校生活の帯時間(決まった時間に毎日10分程度)か英語の授業の一部に10分程度行うことから始めるのもよいだろう。

4. 結び

社会生活において役立つ英語力を求めるならば、「読みの持久力」は、今後英語リーディング力向上において重視されるようになるであろう。「読みの持久力」は、英語多読によって向上すると考えられ、言語運用基盤として、使用可能な言語知識を蓄える器に例えられた。上位概念として提案される「認知持久力」とともに、検証や指導方法についてさらに研究や実践が求められる。英語多読を行う際、日本の英語学習者は英語の選書に困難を覚える。英語多読授業における適切な指導を行う必要があり、シラバスデザインにおいても選書指導が盛り込まれることを望む。また複数年の英語多読授業のシラバスも提案したい。

5. 引用文献

- 酒井邦秀・神田みなみ編著 (2005) 『教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ—』 東京:大修館書店。
- 豊田高専教育 GP プロジェクト中間報告会 (2009) 「多読・多聴授業による英語教育改善の全学展開」 豊田工業高等専門学校。
- Yamamoto, Akio (2006) “Kids-play-with-sand Hypothesis” in EFL Reading-Plant the Seeds for Extensive Reading in Gakushuin. The Gakushuin Boys’Senior High School Bulletin 4: 1-9.
- Yamamoto, Akio (2007) “Beach Hypothesis and Types of Extensive Reading in EFL.” The Gakushuin Boys’ Senior High School Bulletin, 5, 15-25.
- 山本昭夫 (2008) 「易しい英語の本をたくさん読んで身につく力—多読を支える力—」 『金谷憲還暦記念論文集』 東京:桐原書店。
- 山本昭夫 (2010) 「英語多読における知識獲得—読みの持久力は知の基盤の働きをする器—」 『信学技報 TL 2010-7 (2010-05)』 p. p. 33-37. 社団法人 電子情報通信学会。